

各会場  
入場  
無料

# 原発事故14年

# 福島「避難」のかたち展

ふるさとから引き離された人たちの今、ありのまま

福島では原発事故から14年が経つ今も県内外に多くの人々が避難しています。被災地は帰還困難区域を抱えながらも全ての自治体で居住可能になりましたが、散り散りにならざるを得なかった避難者の苦難が忘れられがちな現状は否めません。

慣れ親しんだ地域から引き離されたままの人、戻らないことを選択した人、今は難しくて帰還の機会をうかがっている人、避難先とふるさととの絆を保とうと奮闘する人。それぞれの事情や思い、「避難」のかたちは各人各様です。

本展では、原発事故の風化を防ぐため、当たり前の日常を過ごしていた土地から避難を強いられた人々のあの日からこれまでを、写真やルポルタージュで振り返ります。



photo/かつて避難指示区域だった大熊町野上地区の田園風景

## 東日本大震災・原子力災害伝承館 エントランスホール

福島県双葉郡双葉町大字中野字高田39

2025 7/18 金 ▶ 9/29 月

9:00-17:00 (最終日は15:00まで)

火曜日(祝日の場合は翌平日)は休館、  
8/12、9/23は開館

## つくば市役所1階市政情報コーナー

茨城県つくば市研究学園一丁目1番地1

2025 8/1 金 ▶ 8/29 金

9:00-16:30 (最終日は13:00まで)

土日祝日は閉庁

## 桜川市生涯学習センター さくらす

茨城県桜川市東桜川一丁目21番1号

2025 8/30 土 ▶ 9/30 火

開館情報は「さくらす」のホームページ  
(<https://www.sakurasu-sakuragawa.jp/>)

をご確認ください(最終日は14:00まで)

9/15を除く月曜日と9/16は休館

主催

福島大学地域未来デザインセンター  
相双地域支援サテライト

相双地域支援サテライトは福島第一原発事故の被災地域と福島大学とをつなぐ  
現地の拠点として、2012年6月、川内村に開設。現在は富岡サテライトと浪江サ  
テライトに職員を配置し、被災12市町村を対象とした支援活動を行っています。



相双地域支援サテライト  
キャラクター  
そうそうくん

お問い合わせ

福島大学地域未来デザインセンター 相双地域支援サテライト

〒979-1112 福島県双葉郡富岡町中央2丁目83 とみおかワーキングベース 2J TEL: 0240-23-6675 e-mail: r411@ipc.fukushima-u.ac.jp





# 原発事故14年 福島「避難」のかたち

ふるさとかから引き離された人たちの今、ありのまま

原発事故避難―。2011年3月11日に発生した東日本大震災からの14年間は、そのまま東京電力福島第一原発事故の被災者にとって避難生活の歳月に当たります。

突然の原子力災害により、周辺住民たちは当たり前の日常を奪われ、着の身着のまま住み慣れた土地から引き離されました。ピーク時の12年5月には福島県内外に16万人以上が避難していたとされます。

避難指示区域が設定された県東部浜通り地方などの被災地は現在、帰還困難区域を除いて全ての自治体で居住が可能になったものの、古里に戻れない、あるいは戻らないと決めた避難者たちは全国に散らばっています。また、県内陸部など避難指示区域の外に住んでいた少なくない人たちも放射線の影響を恐れるなどして自主的に遠隔地に逃れました。

本展では、強制避難と自主避難の別を問わず、長い避難生活を経て帰ってきた人、避難先と避難元の両拠点で暮らす人、避難先に定住した人、遠く離れた土地で新たな目的を見つけたり人など、8組9人の歩みを写真とドキュメンタリーで振り返りました。そこには各人各様の「避難」のかたちと意思があります。

福島の原発事故は、避難という慣れ親しんだ地域との物理的な分断を生んだばかりでなく、この社会で人の心や絆をも引き裂きました。避難者たちの現在のありのままの暮らしを知ることで、あの原子力災害が彼ら、そして私たちに何をもたらしたのかを考える機会になれば幸いです。

主催 福島大学地域未来デザインセンター相双地域支援サテライト  
・記事中の各種データや人物の年齢、肩書などは取材当時です。





# 相双地域支援サテライト

## 福島大学地域未来デザインセンター

震災から1年余りが経過した2012年6月、川内村に被災地域支援の現地拠点として設置。その後、被災地域の避難指示が解除され住民の帰還が進む中で活動拠点を順次移転し、現在は福島大学のほか富岡町と浪江町にサテライトを設置し、被災12市町村を対象とした支援活動を行っています。サテライトのスタッフは福島県から任命された復興支援専門員で、地域復興支援、教育環境整備、企画・連携の3業務を分担して活動しています。

### ● 支援対象市町村

田村市・南相馬市・川俣町・広野町・楡葉町・富岡町・川内村・大熊町・双葉町・浪江町・葛尾村・飯舘村

### ● 沿革

2012 年6月	川内村に「いわき・相双地域支援サテライト」開設
2015 年5月	同サテライトを楡葉町に移転
2016 年4月	「いわき・相双地域支援サテライト」を「相双地域支援サテライト」に改称
2017 年5月	南相馬市に「南相馬分室」開設
2020 年8月	楡葉町の同サテライトを富岡町に移転
2021 年4月	川内分室、南相馬分室を閉鎖し浪江町にサテライトを新設。「富岡サテライト」「浪江サテライト」と呼称

### ● 所在地

#### 金谷川キャンパス

福島市金谷川 1 福島大学地域未来デザインセンター

#### 富岡サテライト

福島県双葉郡富岡町中央 2 丁目 83 とみおかワーキングベース 2J

#### 浪江サテライト

双葉郡浪江町大字幾世橋字六反田 7 番地 2 (浪江町役場内)





# 「被災地」福島 あの日からこれまで

## 日本一の「課題先進地」

2011年3月11日午後2時46分に発生した東北地方太平洋沖地震は、福島県内で震度3から6強を観測した。この地震による大津波が沿岸各地を襲い、富岡町では21メートルの最大波を記録。25年5月現在で、沿岸部を中心に1605人が津波などの犠牲になり、原発事故に伴う長引く避難生活などが影響した震災関連死は2348人に上る。全壊家屋は1万5502棟。南相馬市は直接死と関連死を合わせた死者が1157人を数え、県内で最も多い。福島県の震災関連死の数は、472人の岩手県や932人の宮城県と比べて突出している（両県は24年12月現在）。

大熊町と双葉町にまたがって立地する東京電力福島第一原子力発電所は、震災の津波で外部電源と非常用電源を喪失。12～15日、冷却不能となった原子炉が相次いで水素爆発を起こし、広範囲に放射性物質が拡散する過酷事故に至った。

### 浜通りなど12市町村に避難指示

第一原発から半径20キロ圏内に避難指示が出され、4月には警戒区域と計画的避難区域、緊急時避難準備区域が設定された。これら避難区域は浜通り地方を中心に12市町村に及ぶ。翌2012年4月、年間の積算放射線量に応じ、避難指示解除準備区域（20ミリシーベルト以下になることが確実）と居住制限区域（20～50ミリシーベルト）、帰還困難区域（50ミリシーベルト超）の三つに再編された。その後、14年4月の田村市都路町に始まり、川内村や浪江町、富岡町、双葉町などで徐々に避難指示が解除。現在は除染廃棄物の中間貯蔵施設を含む帰還困難区域だけが残る。

同区域内で除染やインフラ整備などを先行して進める特定復興再生拠点区域（復興拠点）は6町村、2747ヘクタールに設定され、2023年11月の富岡町を最後に全ての復興拠点で避難指示が解除された。さらに、帰還希望の住民が居住できるよう除染などを進めて早期の避難指示解除を目指す特定帰還居住区域が23～24年、大熊、双葉、浪江、富岡の4町に設定された。

### 人口減少に悩むが復興の槌音も

国や自治体が避難指示を出した被災12市町村の総面積は約2080平方キロメートル。そのうち帰還困難区域は東京ディズニーランド約665個分の309平方キロメートルを占め、県土の約2.2%に当たる。2025年5月現在で県内外に2万4110人が避難している（福島県発表）。

避難指示一部解除後の2020年に実施された前回の国勢調査によると、12市町村の人口は約12万4千人で震災前年の調査に比



福島第一原発で水素爆発を起こした1号機（中央左）と3、4号機（同右奥）  
＝2011年3月15日撮影、東京電力HD提供



JR双葉駅東口では2025年度中の開店を目指して商業施設の建設が進む＝25年1月撮影

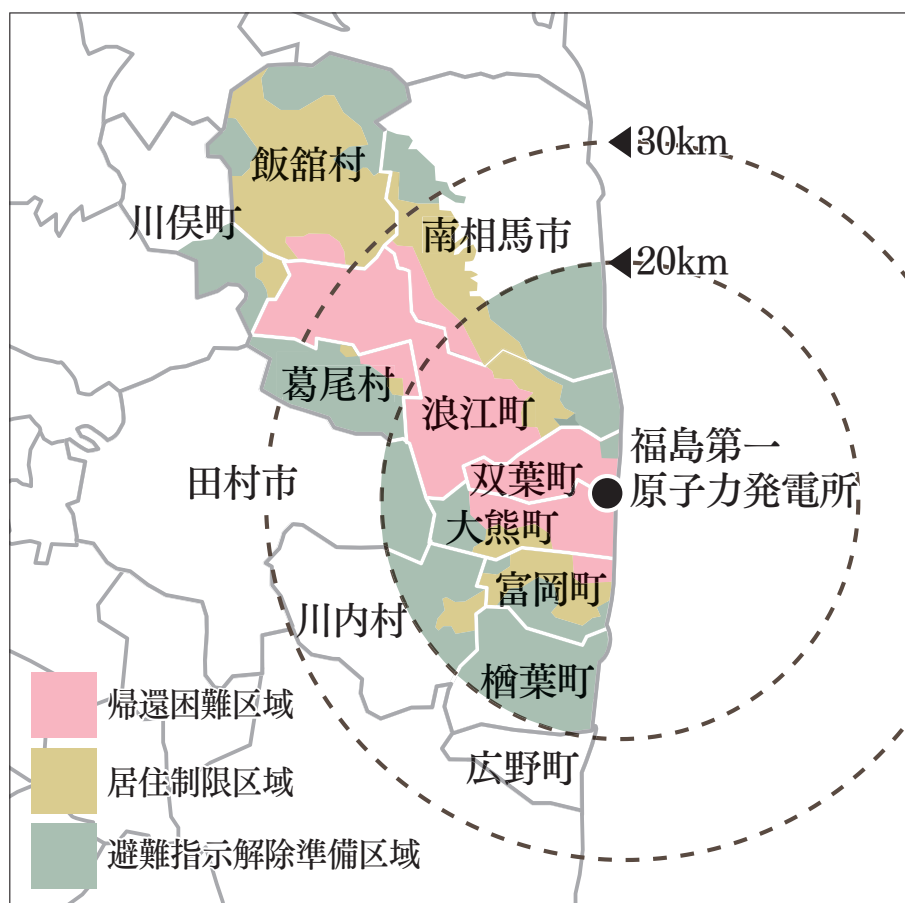
べて4割減少。帰還困難区域が面積の大半を占める双葉町では現在も居住者が200人に満たないなど、人口回復がはかばかしくない。雇用やにぎわいの創出、医療体制や教育環境の充実を期してさまざまな悩みを抱えており、原発事故の影響を受けた福島の被災地はわが国で最も顕著な「課題先進地」といえる。

一方で被災地を走るJR常磐線の浪江、双葉、大野各駅周辺の再開発が本格化するなど、復興の槌音も響く。

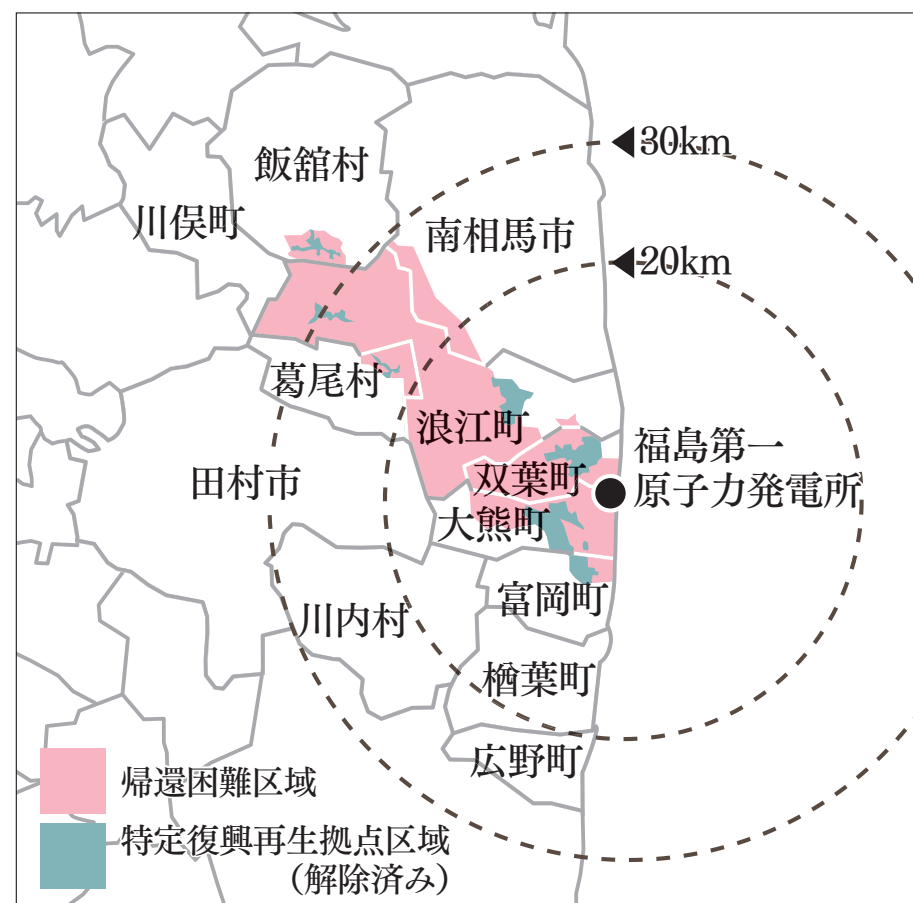
### 避難指示区域の変遷



避難指示区域の設定（2011年4月22日）



区域再編（2013年8月8日時点）



進む避難指示解除（2023年11月30日現在）



# 避難者とは誰か

## 県発表で2万4千人超 定義まちまち…実数、より多く

東京電力福島第一原発事故は、スリーマイル島原発事故（1979年）やチェルノブイリ原発事故（1986年）と並んで、空前の大規模避難を人々に強いた。「2、3日後には戻れるだろう」。周辺住民の多くはそんなふうと考えながら、促されるままに自家用車で、あるいは自治体の手配したバスなどで住み慣れた土地を後にした。それが極めて長期にわたる避難生活の始まりだとは知らずに。原発が立地する大熊町の全町避難は8年、同じく双葉町のそれは実に11年半に及んだ。

国や自治体による避難指示が出たのは浜通り地方などの次の12市町村だ。〈田村市（都路町）・南相馬市（原町区の一部と小高区）・川俣町（山木屋地区）・広野町・楡葉町・富岡町・川内村・大熊町・双葉町・浪江町・葛尾村・飯舘村〉

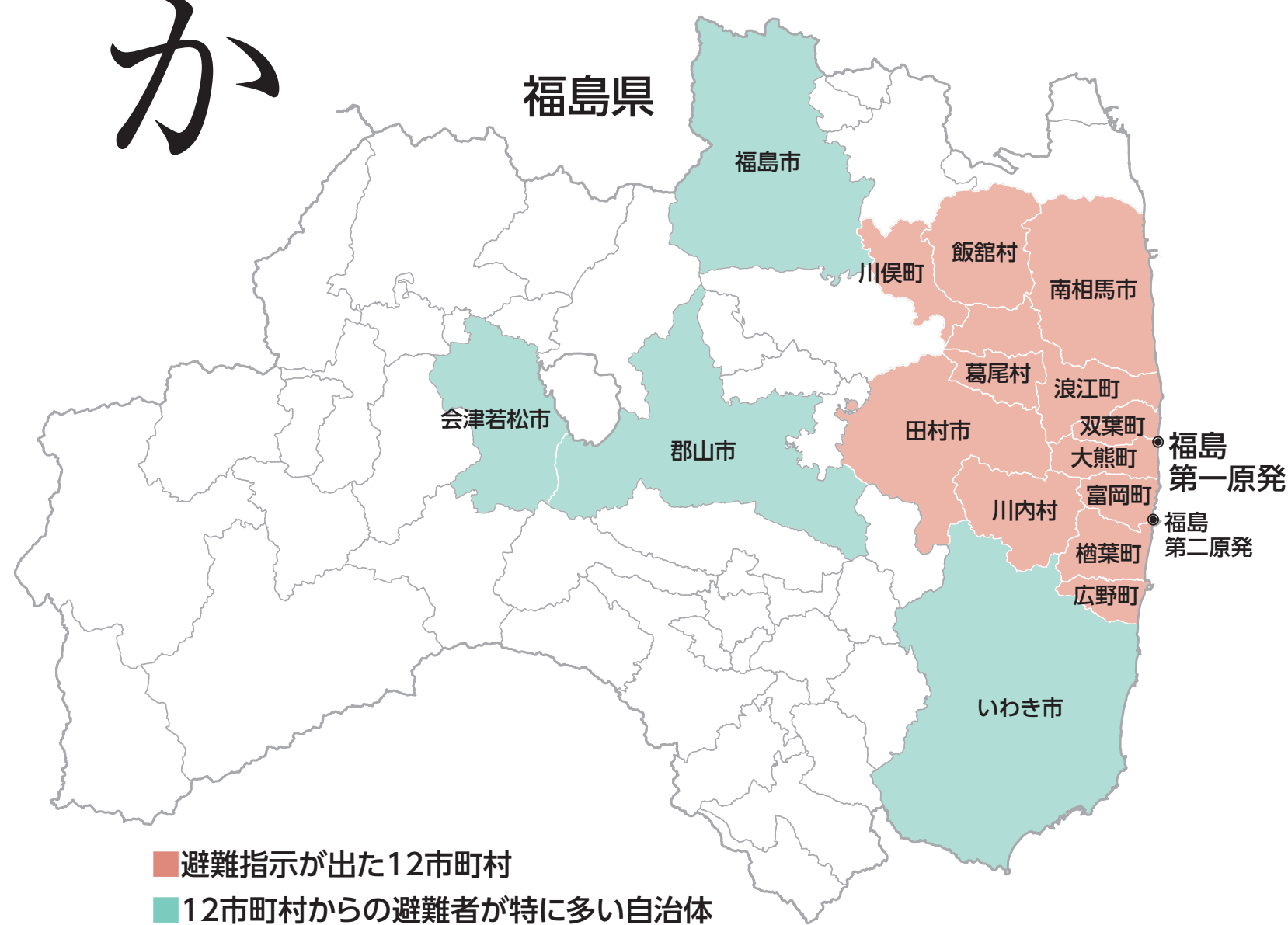
この中で富岡、大熊、双葉、浪江各町などは双葉郡の南に隣接するいわき市のほか、内陸の郡山市や福島市、会津若松市などに仮設住宅を整備し、集団で避難。その後、住民らは避難先で建設された県営の復興公営住宅などに入居したり、個人で住宅を購入したりした。避難解除後に帰還を果たし、各自治体の災害公営住宅や民間住宅に移り住んだ人もいるが、戻らないことを決めた住民は多い。



2011年3月12日、富岡町から隣接する川内村へ避難する車の列（富岡町提供）



郡山市の複合施設「ビッグパレットふくしま」には2011年3～8月、富岡町と川内村の住民ら最多2500人が避難した（富岡町提供）



## 強制避難と自主避難

これら避難指示に伴い古里から引き離された住民のほかに、放射線の影響を懸念するなどして避難区域外から遠隔地に自主的に逃れた人たちが存在する。本展の登場人物では、榎内正和さんと仲野和香子さん、小泉良空さん、菅野信雄さん・真里子さん夫妻、鎌田昭三さんが強制避難者、井上美和子さんと宇野朗子さん、森島幹博さんが自主避難者に当たる。

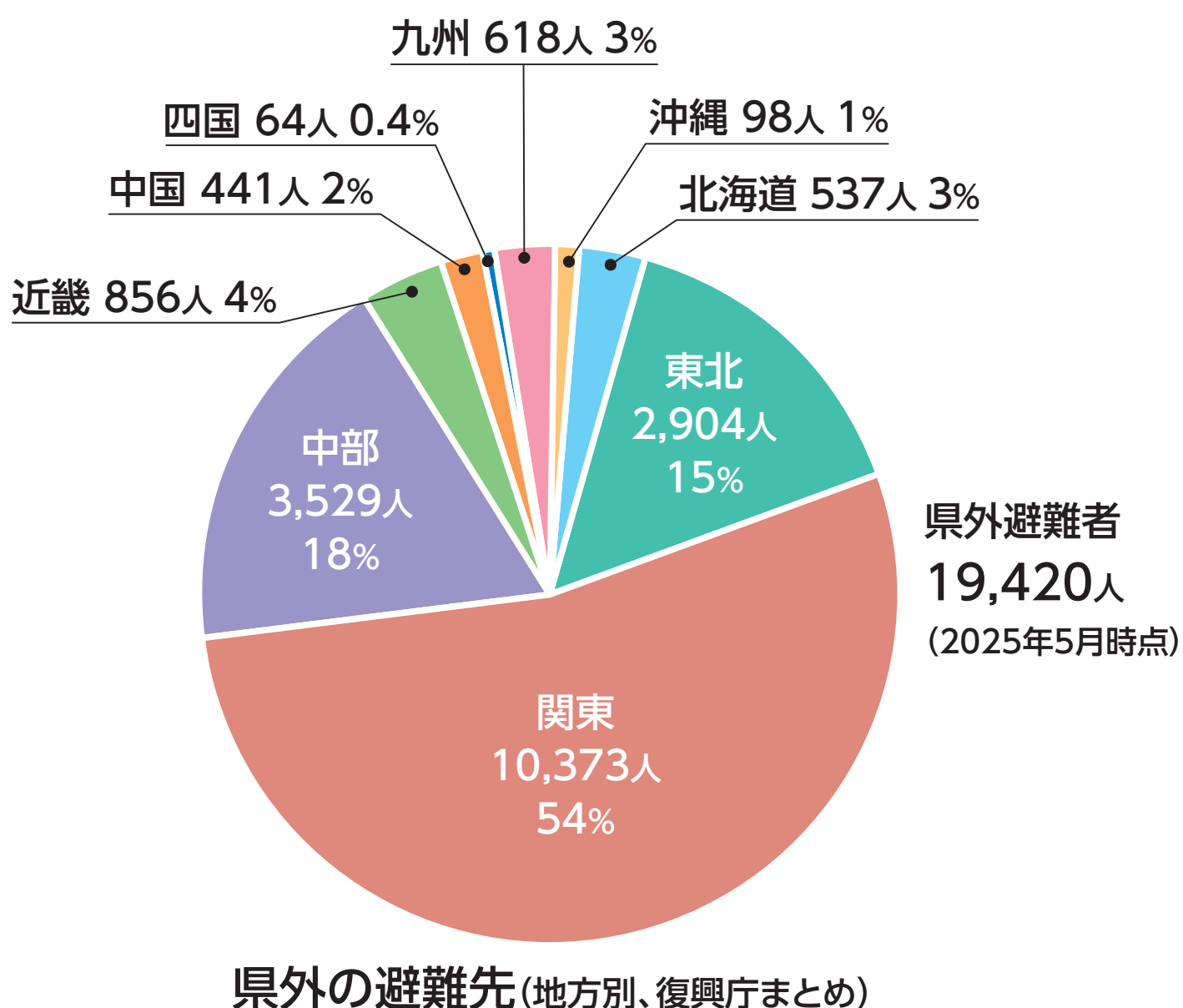
このような福島県の「原発事故避難者」は県や復興庁によると、2025年5月時点で県内外に2万4110人（うち避難先不明5人）いて、最多を記録した12年5月の約16万人より8割以上減少したとされる。このうち1万9420人は県外への避難者で、総務省が運用する「全国避難者情報システム」に基づき、避難先の自治体に自らの情報を届け出るなどした自主避難を含む避難者の数を復興庁が集計したものだ。

福島県が取りまとめた県内避難者数は4685人だが、災害救助法の適用に伴う応急仮設住宅や「みなし仮設」の借り上げ住宅などへの入居者を当初から計上し、復興公営住宅などに移ると避難者から除外するため、最新の実態を反映していないとの指摘がある。

## 特例法対象は5万4600人

一方、避難者が住民票を移さないまま避難先の自治体で一定の行政サービスを受けられるようにする「原発避難者特例法」に基づく届け出などにより、避難指示12市町村にいわき市を加えた、同法指定の13市町村が避難者の所在を把握している。これによると、13市町村の県内外への避難者の数は2024年12月～25年1月時点のデータで、合計して約5万4600人に上る。

行政が避難者を定義する要件は①全国避難者情報システムへの届け出②応急仮設住宅などへの入居③原発避難者特例法による届け出—などまちまちで、統一されていない。届け出はいずれも任意であり、実質的な避難者の数は公式発表を大きく上回ると思われる。もはや「避難者」であるとの自覚のみが、避難者を避難者たらしめていると言ってもいいのかもしれない。

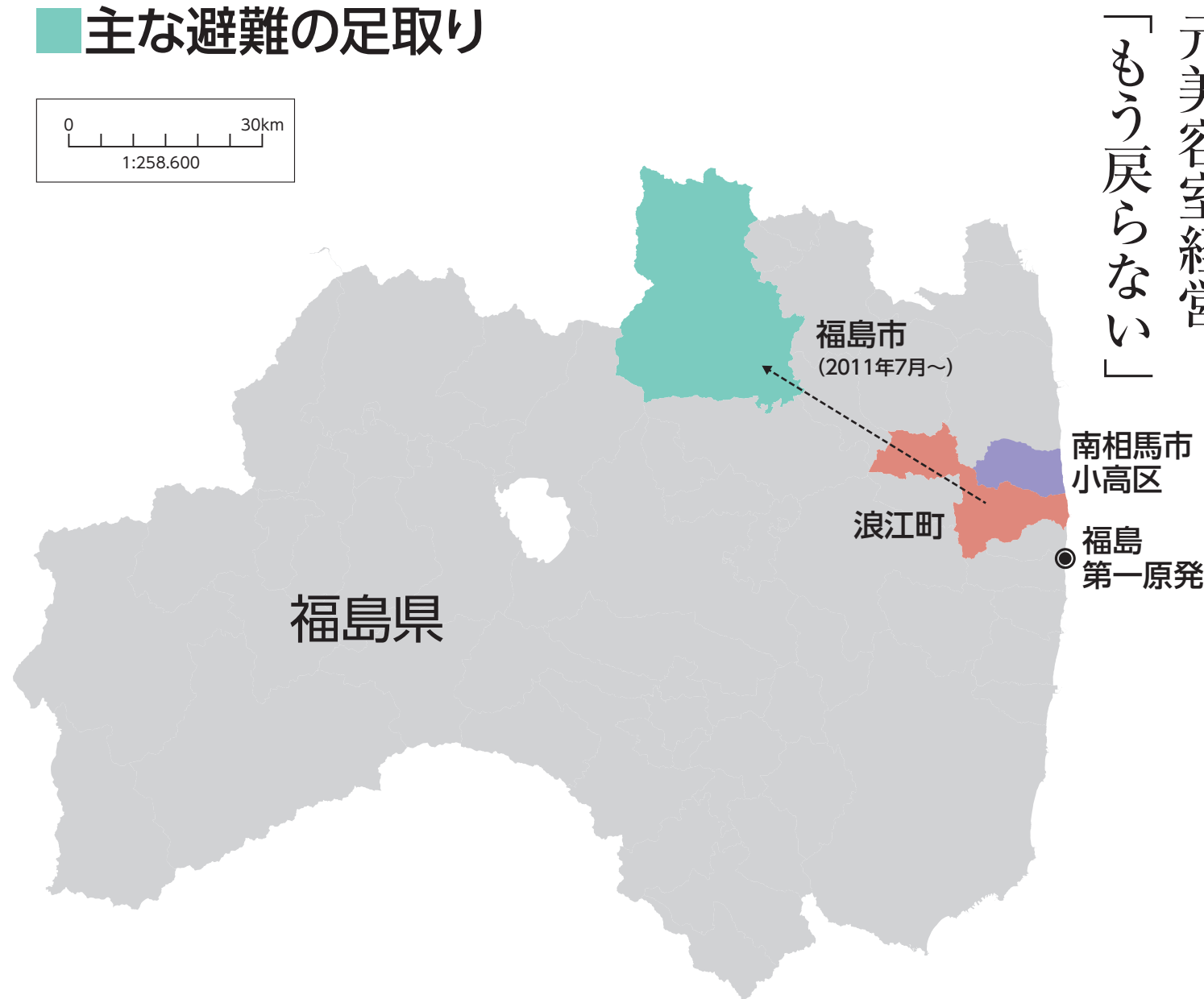




# 菅野 信雄さん、 真里子さん 夫妻

元美容室経営

「もう戻らない」



## 古里は相馬野馬追の聖地

信雄さんの生家は国の重要無形民俗文化財、相馬野馬追で裸馬を捕えて神前に奉納する「野馬懸」(のまかけ)が行われる相馬小高神社のすぐそばにあった。野馬懸の日はいよいよかぶとの騎馬武者が町中を勇壮に練り歩く。パカッ、パカッ。古里を思うと、今もひづめの音が耳の奥に響く。

8人きょうだいの末っ子。中学を卒業するとすぐに上京して銀座などのすし店で修業したが、2年後、兄弟子と仲違いをして小高に舞い戻る。親友の誘いで美容師を志し、専門学校の入学金を捻出するのに通ったアルバイトが東電福島第一原発5、6号機の建設工事だった。1974(昭和49)年ごろのことだ。機械でコンクリートをかき混ぜる単純な作業だったが、ひと月で当時の大卒初任給のほぼ2倍に当たる15万円を稼いだという。

## 繁盛した美容室と居酒屋

信雄さんと宮城県栗原市出身の真里子さんが出会ったのは、2人が就職した東京・あきる野市の美容院。1985(昭和60)年に結婚し信雄さんの母親と同居する



1993年ごろ、娘(手前2人)の七五三で浪江町の自宅前にそろった一家

るために移り住んだ浪江町で1989(平成元)年、念願だった自分たちの店を開いた。バブル崩壊前夜。それでも原発労働者が多い人口2万超の町の景気はよく、客足は絶えなかった。生まれた娘2人を育てるため、夫婦で懸命にハサミを操った。

信雄さんは趣味の海釣りが高じて、2009(同21)年に釣果や漁師から直接仕入れた魚介類が自慢の居酒屋を近所に開店。福島豊かな海の幸「常磐もの」のヒラメやホッキガイを昔取った杵柄で手際よく調理すると、左党に喜ばれた。

## 原発事故知らずに避難

その日も午前中は自宅兼店舗の美容室で働き、昼食後に居酒屋

の仕込みを終えて、自宅の部屋で横になろうとしていた。その途端、ぐらりと来た。揺れは激しくなるばかりで収まる気配がない。外に飛び出すと、割れたガラスの破片で足裏を切っているのに気付いた。

翌日、町に避難指示が出て、原発事故が起きたのも知らないまま夫妻と当時94歳の母親、22歳の次女の4人で逃れ、親戚らを頼って南相馬市内や仙台市などを転々とした。福島市笹谷地区の仮設住宅に入居できたのは7月になってからで、そこで5年間を過ごした。母は避難生活で認知症が進み、震災の翌年に亡くなった。

## がん罹患で帰還断念

福島市北沢又地区の戸建ての復興公営住宅に落ち着いて1年後の2018(平成30)年。信雄さんが家で夕食を取っていると右脇腹がうずき出し、脂汗が止まらない。胆管にがんが見つかり、市内の大病院で手術を受けた。通院する間に2度、轟音を立ててドクターヘリが発着するのを目にした。「もし浜通り(の被災地)に住んだら、これに乗せられるんだべなあ」。浪江町の自宅はいずれ戻るつもりで除染や修繕を施していたが、ついに取り壊した。

「もし俺が40代だったら浪江に帰ってる。でも人がいない町でお客様がどれだけ来るのか。挙げ句の果てに病氣持ってたらさ。それでもう諦めた。だったら残りの人生、楽しく生きようって」

## 「考えても分からない」

真里子さんも戻る選択肢はないと言いながら、「今いる場所は便利だけど、そんなにいいとも思わない。やはり自分の持ち家ではないから」と複雑な心境だ。

信雄さんはがんが治癒した今、避難先の新しい仲間たちと毎週のテニスで汗を流す。

「いろいろ考えるんだよ。原発事故がなかったら健康でいられたのか、あるいは避難生活の不摂生やストレスで発病したのか…。今となっては何とも分からない」。それでもさ、と言って笑顔で続ける。「こうして元気でいられるのが何よりだね」

パネル写真は福島市の自宅縁側で笑顔を見せる信雄さん(右)と真里子さん。

## 避難先が「ついのすみか」

南相馬市小高区出身の菅野信雄さん(68)は震災当時、浪江町で妻真里子さん(66)と共に美容師として腕を振るっていた。「小高が古里なら、浪江は俺を育ててくれた場所かな」。思い出深いどちらの町にも原発事故の影響で5年以上、立ち入れなかった。避難した福島市でがんを患ったのをきっかけに医療体制が不安な被災地への帰還を諦め、入居中の復興公営住宅を「ついのすみか」と決めた。趣味のテニスに熱中し「残りの人生、楽しく生きなきゃ」と屈託なく笑う。





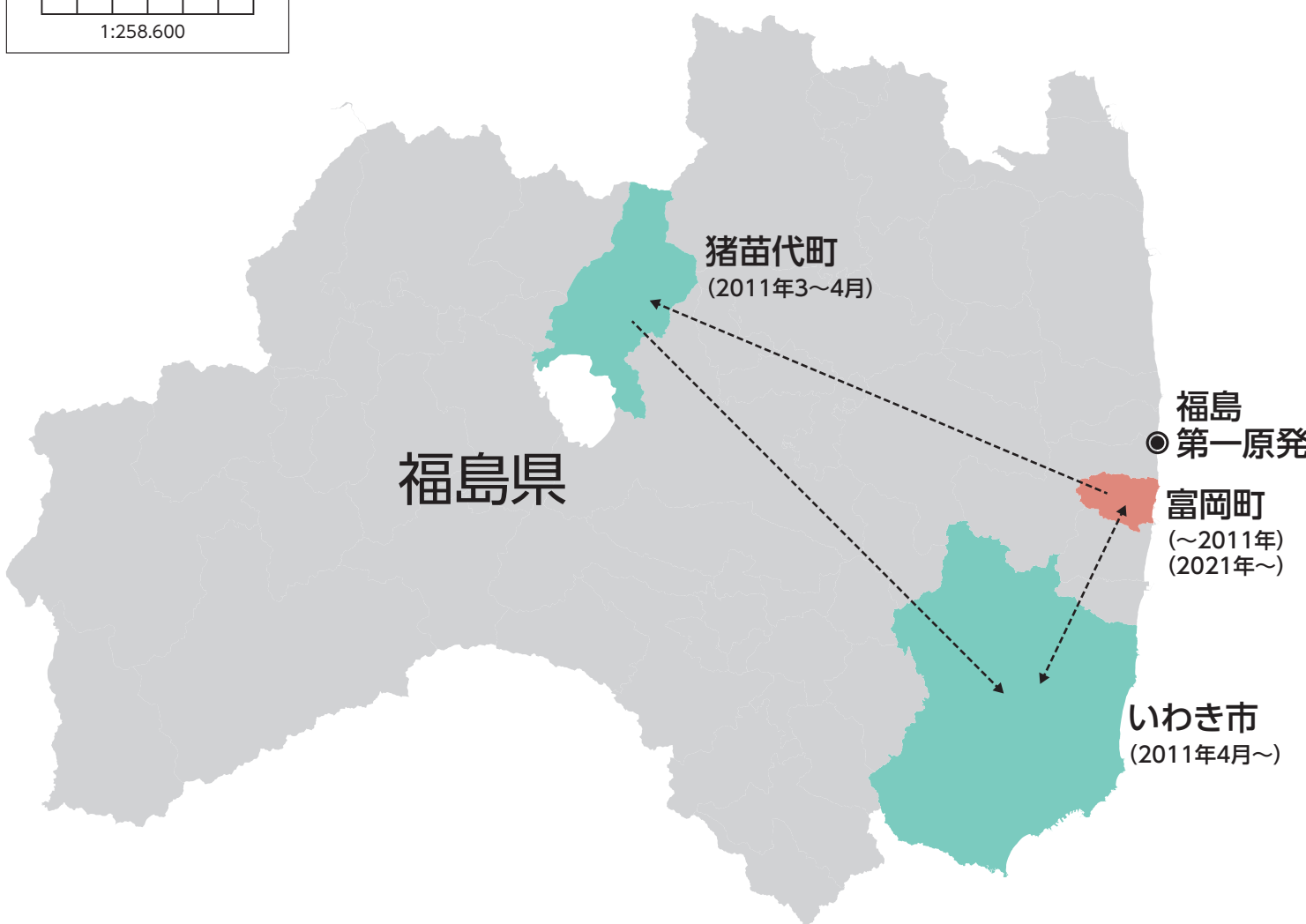
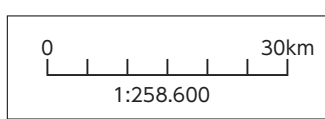


# 榎内 正和さん

創作太鼓集団代表

「二地域で生きる」

## 主な避難の足取り



## 原発景気に沸く町から東電へ

中学校に上がった1971(昭和46)年、第一原発1号機が営業運転を始めた。75年に富岡町と檜葉町にまたがる第二原発が着工し、国道沿いには飲食店や自動車販売店などが次々と軒を連ねた。出稼ぎ頼みの兼業農家が多かった町は空前の「原発景気」に沸き、建設業を中心に多くの雇用が生まれた。

進学した南相馬市の工業高校の推薦を受け、77年、東電に入社。第一原発に配属された。技師として施設内外の放射線を測定する業務に長年携わった後、人と関わりたいと志願して広報部に異動した。「原発はいざという時も五重の壁に守られていて安全なんです」。原発入り口のPR施設で、修学旅行生ら見学者に原発の安全性と将来性を熱く説いた。「やっぱり原子力ってすごいね」。そう言われると、やりがいと誇りを感じた。

巨大地震があった時も同じ施設にいた。高齢の母親を案じて太平洋を望む高台の家に戻ると、海底が見えるほど波が引いている。大津波の予兆だ。家族5人で川内村や田村市など避難所を転々とする間にも、電源を全て失った第一原発は水素爆発を繰り返し、荒れ狂った。



2001年に小浜風童太鼓を結成し、長男(左)と共に

## 「うそつき」罵声浴び土下座も

社命を受け、埼玉県加須市などに避難した双葉、浪江両町の災害対策本部に駐在して原発事故の状況を逐一報告した。秋、福島市の被災者支援の部署に赴任すると、自宅周辺などの放射線量が気になる住民らに頼まれ、県内外で線量測定の仕事に従事した。「東電のうそつき」。やり場のない激しい怒りをぶつけられ、線量が高くて家財を持ち帰れない人から「ふざけるな」と胸ぐらをつかまれたことも。時に土下座して謝った。

## 身も心も…原発事故が生んだ分断

家族は震災の年にいわき市のアパートに避難し3年後、同市内に自宅を新築した。富岡町は避難指示解除のめどが立たず、車を駆って片道1時間以内で行き来できる土地を選んだ。ふとしたきっかけで、避難指示区域から来たことを周りに知られてしまった。わざわざ家を見物に来る人がいたり、近所であいさつしても無視されたりした。賠償額の多寡を巡るねたみ、そねみが冷遇の背景にあると感じた。身も心も居場所から引き離される。妻(65)はふさぎ込み、うつ病と診断された。

## 創作太鼓の響きに救われ

つらい思いから解放してくれたのが、震災の10年前に自ら立ち上げた太鼓集団「小浜風童太鼓」の活動だった。20代の頃、古里の小浜地区で復活させた盆踊りでたたく相馬盆唄の太鼓がベース。町域の大半で避難指示が解除された2017(平成29)年に東電を辞し、19年からはいわき市の復興公営住宅や富岡町で避難者らを相手に太鼓教室を開く。太鼓集団は長男(35)が跡を継ぎ、元気になった妻、孫の男児(7)も一緒にばちを握る。

## 「盆踊りの伝統つなげたい」

2021(令和3)年には、戦後に双葉町出身の祖父が入植し、父親が開墾した土地を守り抜きたいと、解体した自宅跡地に太鼓の練習場を併設する平屋を再建した。震災で中断し23年に本格再開した町の盆踊り大会を盛り立てようと心血を注ぐ。「子どもたちに盆踊りを教えれば、大人になっても毎年帰ってきて、太鼓をたたいてくれるだろう」。6年もの間全町避難を強いられ、居住人口が震災前の2割に満たない約2500人のこの町で、伝統文化を次代につなげる役目を自任している。

**パネル写真**は富岡町小浜地区に再建した自宅の庭先で。Tシャツの胸には「我が心の富岡」と。

(2024年6月取材)



町民らに太鼓を指導する榎内さん(左端)

## 生まれ変わる町と共に

原発事故当時、東京電力の社員だった榎内正和さん(65)は生まれ育った富岡町で、福島第一・第二原発の稼働による地域の発展と、事故がもたらした地理的、精神的な分断という両極を経験した。今は避難先のいわき市に構えた自宅と、避難指示解除後に父祖の地に再建した家との間を往復しながら暮らす。30代で始めた創作太鼓と復活させた盆踊りの文化を、新生する町に根付かせようと日々奮闘する。





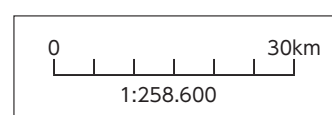


# 仲野 和香子さん

主婦

「いつか帰れば」

## 主な避難の足取り



## 古里だし戻りたい…けど

過酷事故を起こした福島第一原発が立地する大熊町。阿武隈山地を望む緑豊かな田園に囲まれて成長した仲野和香子さん(55)は、特産の梨を栽培する農家に嫁ぎ、平穏な暮らしを送っていた。町から南に約50<sup>キロメートル</sup>離れた同じ浜通り地方のいわき市に避難して13年。「古里だからいつかは戻りたい」が、このままでも構わない、とも。実家も婚家も取り壊されて町に住む所はなく、心は微妙に揺れる。

## 自然に囲まれた幼少期、青春時代

実家は米農家。物心ついた頃の最初の記憶が、かやぶきから瓦屋根の家に建て替える槌音だった。家の前には田畑が広がり、遠くに阿武隈山地の青い山並みが見える。4世代8人でつましく暮らし、夏になれば近くの海水浴場にみんなで出掛けて思う存分遊んだ。

通学した町立熊町小学校は緑化運動に力を入れていて、花壇のサルビアやカンナの赤、校庭の芝生の緑が青空に映えて美しかった。同小は今、除染土壌や廃棄物の中間貯蔵施設の敷地に含まれ、校舎も教室の中もあの日から時が止まったままだ。

大熊町と接して原発がまたがる双葉町の県立高に常磐線を通った。吹奏楽部の部活に明け暮れ、双葉駅で1時間に1本の電車を待つ間、駅前のハンバーガーショップで友達や先輩とおしゃべりに花を咲かせた。

## 娘2人に恵まれ、幸せな日々

仙台市の大学を卒業した1992(平成4)年、地元に戻って東京電力の子会社に就職。第一原発正門前のPR施設で来館者の案内業務を担当した。その頃結婚した中高で同級生の夫(54)も原発内の関連企業に勤め、原発の立つ福島浜通りでは典型的な共働き夫婦だった。夫の両親は梨の果樹園を経営しており、農繁期は手伝いに勤しんだ。女の子2人を授かって幸せだった。

震災の日は臨時事務補助員として町内の県立大野病院にいた。玄関前のポストに郵便物を投函しようとして外に出た途端、激しい揺れに襲われた。駐車場のアスファルトは波打ち、ほうほうの体で事務室に戻ると、スチール製のキャビネットが自席に倒れ込んでいた。余震を恐れ、入院患者たちを手分けして駐車場に連れ出した。手術中の患者がいたが、ドクターヘリを呼んでも来ない。仲野さんも家族と連絡が取れない。「いったん帰宅して、また明日来ます」。そう言い残したが、再び戻ることはなかった。



2009年ごろ、たわわに梨が実る果樹園で夫(右から3人目)、義理の両親(右側の2人)と共に

## 「原発事故が起きて死ぬかも」

消防団員の夫と行政区長のしゅうとは震災対応に追われていて、しゅうとめや当時中学2年と小学6年の娘ら女性だけで自宅庭の車中で待避した。テレビが原子力災害の恐れを報じている。原発の仕組みはよく分かっていた、直感した。「遠くに行かなきゃ。もしかしたら死ぬかも」。翌朝、町域の大半に当たる第一原発の半径10<sup>キロメートル</sup>圏内に避難指示が発令。行き先も告げられないまま全町避難のバスに乗り込み、西に約30<sup>キロメートル</sup>の田村市総合体育館にたどり着いた。午後、第一原発1号機が爆発するニュース映像に目が釘付けになった。「もう帰れない」と観念した。

## 小中学校避難で会津若松に

会津若松市の仮設住宅で家族と1年間暮らした。もっと遠い土地に逃れなかったのは、役場機能と共に同市に避難した町立小中学校で、娘たちが以前の友達と離れずに過ごせるようにとの配慮があったためだ。「とにかく子どもたちに寂しい思いをさせたくなくて」

震災の翌年、長女がいわき市の高校に進学するタイミングで同市に移り住んだ。被災者支援のNPO法人に職を得て、避難者が入居する県営の復興公営住宅17カ所に自治会が立ち上げられたのを見届けた。今は派遣会社に登録し、事務の仕事に就く。

## 避難生活は仮住まいの感覚

2019(平成31)年、大熊町は帰還困難区域を除いて避難指示が解除され、新しい町づくりが進む。しかし、古里に足を運ぶのは、墓参りや災害公営住宅に住むしゅうとめに会いに行く時ぐらになった。

いわき市では、仮設住宅を出てから分譲マンションに暮らす。人口30万を超える便利な都会にすっかり根を下ろしたのか。「いいえ。学生時代にアパートに住んだでしょう。一時の住まい、そんな感覚ですね。元々いた所なので、いつかは戻るんだろうな。でも、このままでもいいと思ってるんです」

パネル写真は果樹園の看板だけが残る自宅跡地で。

(2024年6月取材)



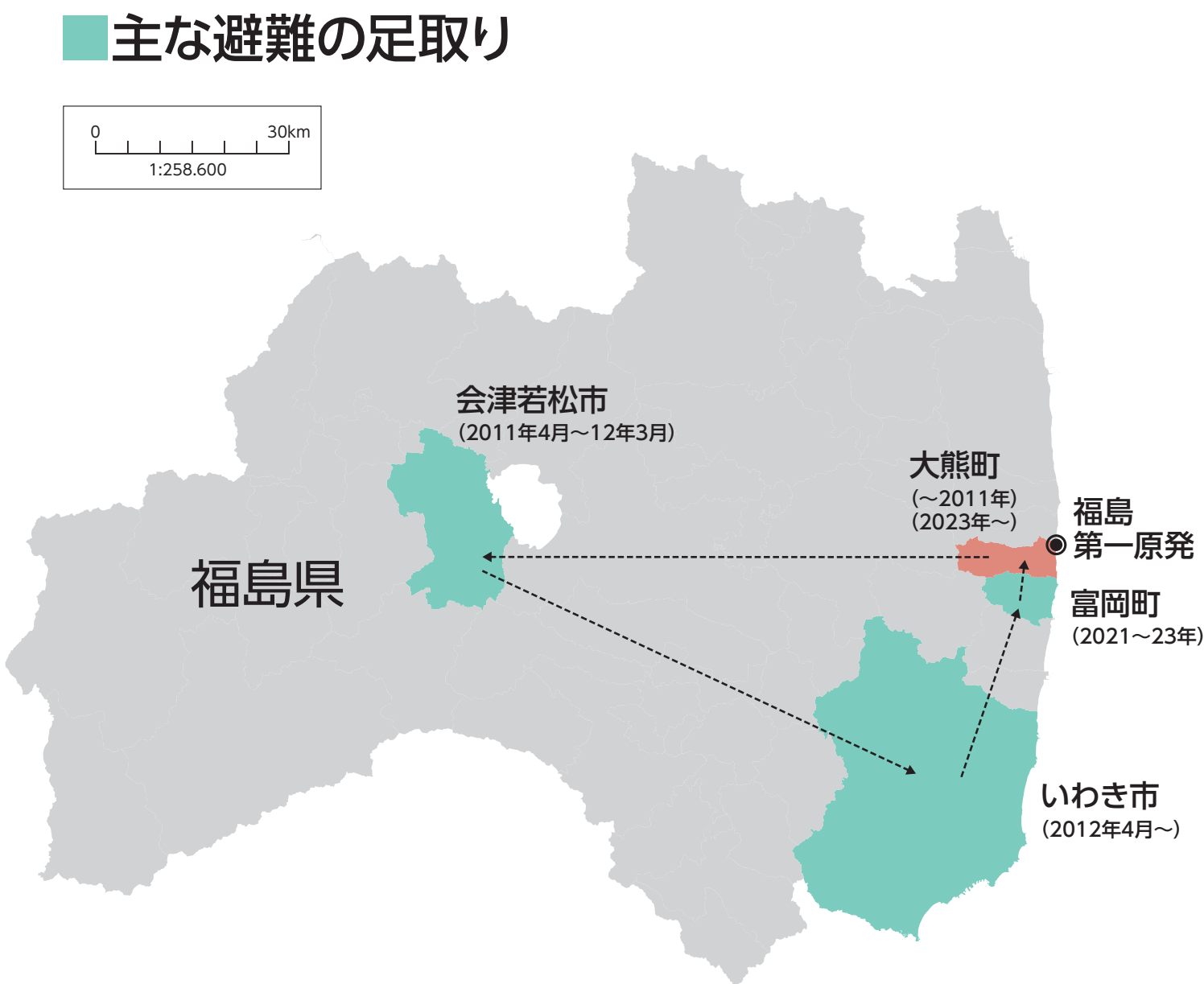




# 小泉良空さん

まちづくり会社職員

「もう避難者ではない」



## 「ただいま」まであと一歩

小泉良空(みく)さん(27)は福島第一原発が立地する大熊町の田園地帯で、原発事故が起きる中学2年まで過ごした。郷土芸能の太鼓や部活の吹奏楽に励み、家族3世代で肩を寄せ合った温かな日々。避難生活で古里を離れても、いつか必ず戻ると決めていた。2023(令和5)年に単身で町内の他地区に帰還したが、あくまでも震災前の実家の跡地にこだわる。本当の「ただいま」まであと一歩。第一原発がまたがる隣の大熊町で震災伝承の活動をしながら、いざれ自宅を再建して家族と暮らすことを夢見る。

## 思い出す青い水田と山並み

大熊町野上地区。「じいちゃん、ばあちゃん、ご飯だよ」。夕暮れ時、一軒家の窓から顔を出し、裏の畑で作業する祖父母に大声で伝えるのが子ども時代の日課だった。一人っ子で、家族5人の愛情を一身に受けた。米農家の祖父は自給できる野菜は何でも育て、庭になる柿やイチジクの実と一緒に食べて食べたのも懐かしい思い出。古里といえば、青い水田と遠くの山並みが真っ先に思い浮かぶ。小学校の郷土芸能クラブでは、相馬盆唄が基調の地域伝統の太鼓を打ち鳴らし、盆踊りや運動会で腕前を披露した。



1998年ごろ、実家裏の畑で祖母栄子さん(右)にあやされる

## 激しい揺れ、崩れる山肌

大地震があった日は中学校から帰宅後、2階のこたつで母親とくつろいでいた。揺れが長く、あまりにも激しい。古びた木造家屋はギシギシと音を立て、あわてて外に飛び出した。家の塀にしがみついてやり過ごしていると、山肌が崩れて砂煙が上がるのが見えた。夕方までに一家全員がそろった。翌日に両親らと軽自動車に乗り込み、西に約30キロの田村市船引町に避難。さらに県外の親戚宅などを転々とし、4月、役場機能と小中学校が移った会津若松市にたどり着く。土地の人たちは温かく、なじみの教師や級友にも囲まれて充実した1年間を過ごした。

## 離れて郷土愛いつそう強く

進学したいわき市の高校へは、家族と引っ越した同市の仮設住宅から通った。大熊町出身の新生は自分一人。「大熊から来たことを隠したくない」。思い切って打ち明けると、みんなが応援してくれ「いじめられるかも」との心配は吹き飛んだ。「胸を張って、古里の名前や帰りたい気持ちを言ってもいいんだ」。郷土愛をいつそう強くした。

2014(平成26)年の秋。古里の避難指示解除の行方が不透明

な中、いわき市内に自宅が新築された。家族が再び同じ屋根の下に勢ぞろいしてうれしかった反面、「もう大熊に帰らないのか」「カチツとはまらない感じ」と複雑な思いが拭えなかった。

大熊の実家を取り壊されたのは2019年のことだ。解体現場には「怖くて」一度も足を運ばず、父が通信アプリで送ってくれた写真も見えていない。自分の中で「家」の存在の大きさに気付き、東京の大学を卒業後、郡山市が本社の住宅メーカーに営業職で入社。しかし、数字の成果が求められる世界で士気を保てず、古里の復興に直接携われないもどかしさが高じて1年余りで退職してしまう。

## 再び古里へ「避難と帰還の間」

「戻ってきなよ」。大熊町でのイベントなどに参加するうち、親しい人たちが声を掛けてくれ、同町と隣り合う双葉町のまちづくり会社「ふたばプロジェクト」に就職した。採用された2021(令和3)年当時、双葉町は町域の9割に立ち入れず、居住人口はゼロ。24年12月現在、JR常磐線双葉駅の西側に整備された町営住宅などに震災前のほぼ2%に当たる約170人が暮らす。

23年には古里のアパートに転居した。「でも完全に『帰ってきた』のではない。実家の跡地に家を建てるまでは」。ただ、地元と呼べる場所に戻った時点で「避難者、被災者のくくり」からは外れ、今は「避難と帰還の中間のあいまいな状態かも」という。

## 景色変わっても死ぬまで住む

まちづくり会社で担当する震災伝承の仕事では、廃墟が点在し「ゴーストタウン」といわれた双葉町が「それだけじゃなく、着実に前進している」ありのままの姿を、県内外から訪れる教育旅行の参加者らに正しく伝えようと心がける。

2024年11月末、木枯らし吹く双葉駅周辺。小泉さんは首都圏の来訪者らを避難住民が自宅跡地に設けた小さな花壇に案内し、原発事故前の生活をしのぶ住民の切ない心情を代弁した。「双葉は今まさにスタートしたところ。1年後はまた風景が変わる。ぜひ再訪を」と呼びかけ、最後にきっぱりと言った。「私は死ぬまでこの地域にいます」

パネル写真は門柱や塀が残る野上地区の自宅跡で。

(2024年9、11月取材)





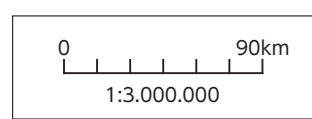


# 井上 美和子さん

文筆朗読家

「避難は続く」

## 主な避難の足取り



## 出生地は帰還困難区域の中

疾駆する馬の絵付けで知られる陶芸品、大堀相馬焼の産地である浪江町大堀地区で生まれた。震災前は阿武隈山地を背に登り窯の煙突から煙が立ち上るのどかな里山だったが、窯元の多くは立ち退き、今も一部を除いて帰還困難区域のままで。

3歳の時、両親と兄妹の家族5人で町の中心部に引っ越した。雨漏りのひどい借家に住んでいた時期もあり、土木・建築の出稼ぎで一家を支えた父が数年後に2階建ての自宅を新築すると、うれしくて小躍りした。坪庭に設えた「ししおどし」がカタンと音を立てるのを飽きずに眺めた幼い日。自慢の家は原発事故の後に父が解体を決断し、玄関前に2人並んで最後の写真を撮った。

## 臨界事故で知った放射能の怖さ

20代で東京電力の関連会社に就職し、第一、第二両原発で設計・製図ソフトのオペレーターを務めた。高給で福利厚生が充実していたのに引かれた。その後の転職先、第二原発の立つ富岡町の携帯電話販売店で勤務していた1999(平成11)年9月。店の電話がひっきりなしに鳴り、今すぐ複数台の携帯電話を調達してほしいと言う。茨城県東海村の核燃料加工会社で発生した臨界事故。電話の主は東電や関連企業の技術者らで、事故対応の支援のため携帯を受け取っては次々と現場に向かった。みんな血相を変えていて、「何かとんでもないこと」が起きていると悟った。

それから12年後のあの日、井上さんはギター職人の夫(59)と手ずから建てた、南相馬市鹿島区の山あいの家にいた。大地震の翌日、爆発直後の第一原発1号機の映像を目にすると、チェルノブイリ原発事故や東海村臨界事故の記憶がまざまざとよみがえり震え上がった。「とにかく遠くに逃げなきゃ」。自宅は第一原発から約35<sup>キロ</sup>。避難指示区域の外だったが、夫、当時4歳と2歳の娘の4人で車に飛び乗って南西に約70<sup>キロ</sup>の福島空港へ。そこでは順番待ちの列が長く続き、いつ搭乗できるかも分からない。「新潟港から関西方面に行くフェリーがあったはずや」。大阪出身の夫が気付いた。

船上の人となり、翌朝にたどり着いたのが福井県の敦賀



2008年、南相馬市の自宅で生まれたばかりの次女と長女を抱く井上さん

港だった。同県は4市町に15基が立ち並ぶ「原発銀座」。ターミナルで声をかけてくれた清掃員の高齢女性に原発の危険性を熱っぽく説くと、こう返された。「気持ちは分かるけど、(存廃は)上の人が決めることやしねえ」。絶望に追い打ちをかけた。

## 法廷陳述が朗読劇の契機に

夫の両親が住む大阪・都心部の集合住宅に身を寄せたが、幼い娘2人は環境の激変にストレスをため込んでしまう。関西一円の自治体に片っ端から電話して、姉妹がそろって入れる保育園を探した。条件を満たしたのが京都府綾部市で、住まいを貸して避難者を支援したいという市民にもつないでくれた。

朗読劇「ほんじもよお語り」の初演は2019年9月。綾部市に落ち着いてから、避難体験を講演することは何度もあったが、そのたびに被害当事者である自分と聴衆との「距離」に孤独を感じていた。転機は同年2月、関西の避難者らが国と東電を相手取って損害賠償を求めた集団訴訟で、原告の一人として意見陳述した経験だ。米が作れなくなった親しい農家の苦しみを訴えるうち、「(福島弁の)ネーティブのスイッチが入った」。なまっただまま陳述を終えると、法廷に拍手が湧き起こった。

## 古里の「積み残し」に愛着

「福島県人の体温」で言葉を紡いだ朗読劇の演目は約20あり、「恨み、つらみを正面に出さずとも、奥底にある無念さとか、静かな怒りや悲しみを織り込んでいる」。

自分が死んだら、どうしても福島の大地に葬られたい。そう望む限り、避難は続くと考えている。自給自足を目指した南相馬市の生活では煮炊きに薪を使い、焼却灰を家庭菜園の肥料にしていたが、「事故後に放射性物質が濃縮する薪の灰自体を作り出したくない」という。

「かつての当たり前の暮らしには戻れない。でも、離れば離れるほど古里のいいところばかり思い出す。望郷の念よりむしろ、積み残してきたことに後ろ髪を引かれるんです」

ほんじもよお…。井上さんのつぶやきがやむことはない。

パネル写真は京都府選定の文化的景観、綾部市のグンゼ旧本社周辺で。

(2024年9月取材)

## 福島弁に泣き笑い込め

ほんじもよお…。まじないのようなこの言葉は、南相馬市から京都府綾部市に避難した井上美和子さん(55)の古里、原発事故に見舞われた浪江町の山あいの方言で「そうは言ってもよ」の意だ。人が苦境にあっても諦めずに何か手立てを探ろうとする時、口を突いて出る一言だという。そのお国なまりに、生まれ故郷を失った悲しみや泣き笑いの情感を込めた朗読劇「ほんじもよお語り」を事故から8年後に始めた。「区切りもつけないまま古里から引き離された」。その無念さが井上さんを表現の舞台に押し上げる。





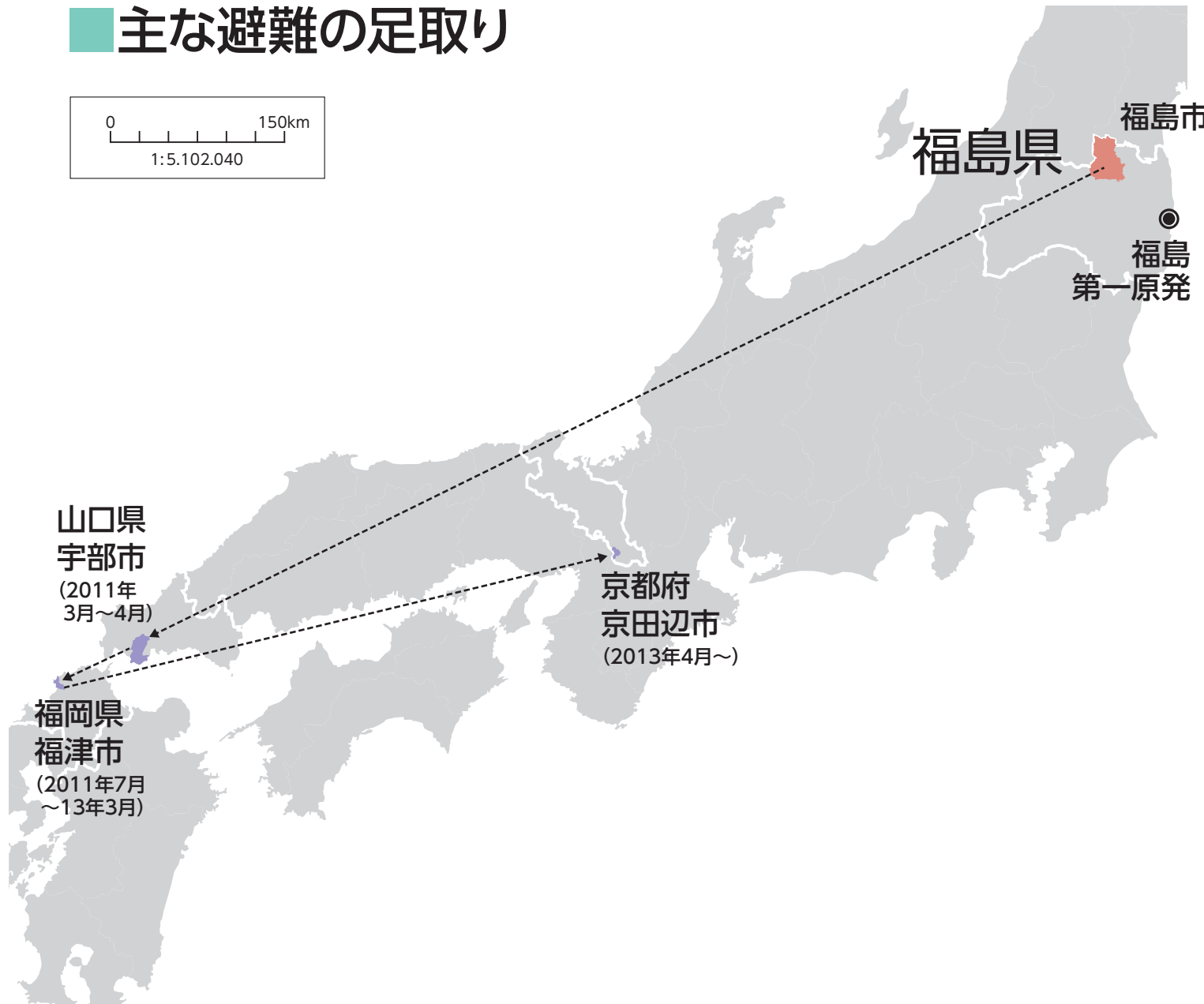


# 宇野 朗子さん

避難者団体共同代表

「避難することを選択」

## 主な避難の足取り



## 「避難の権利」を求めて

宇野朗子(さえこ)さん(52)は福島第一原発事故で当時4歳の娘を連れて、福島市から西日本に逃れた。「長期化する避難や、被災地で被ばく防護に必要な情報や支援が不足している事態への対応が急務だ」として、2015(平成27)年、「避難の権利」を求める任意団体を設立。原発回帰に転換した国策に異議を唱える一方、原発事故への対応を巡るステークホルダー(利害関係者)が政官民などの立場を超えて対話できる場を模索する。

## 「大地に近い生活」脅かす原発

1999(平成11)年、夫の就職を機に、福島市に移り住んで迎えた最初の朝。福島駅から乗り込んだ東北本線の車窓に広がる吾妻連峰の雄大な美しさに、思わず歓声を上げた。関東平野のど真ん中で育った宇野さんにとって、起伏に富んだ福島の実然たる自然風景は鮮烈な印象だった。

2007年に女兒を出産すると、「より大地に近い生活」を志向し始める。その過程で自然農やエネルギー自給の実践者ら多くの友人ができ、互いに学び合うようになった。「自然を脅かさない持続可能な日常を営む友人たちのように、私たち家族も人間らしく暮らしたい」。そんな思いの前に立ちはだかったのが、浜通り地方にそびえる原発の存在だった。



2009年夏、住まいの近くだった福島県立図書館の庭園で娘と共に

## 第一原発プルサーマルに危機感

2010年2月、第一原発3号機でウラン・プルトニウム混合酸化物(MOX)燃料を使用するプルサーマル発電を容認する考えを、当時の佐藤雄平知事が県議会で表明。「危険を増す選択」に衝撃を受けた宇野さんらは反対署名を集め、同年6月、同原発に出向いてプルサーマル中止の要請を行う。正門前に仲間たちと集まっていた時、地鳴りが響き、福島県沖が震源の最大震度5弱の揺れが。恐怖で体がこわばり、「走馬灯のように」家族の面影が頭をよぎった。その4日後には同原発2号機の電源が急停止する事態が発生、宇野さんをさらなる行動に駆り立てる。「ふるさとを第二のチェルノブイリにしないで」。横断幕を掲げて毎日、県庁の前に立った。

## 1号機爆発…私たちはばかだ

翌年3月、宇野さんは月末にいわき市で開く原発の廃炉を求める集会の準備に追われていた。大地震が襲ったのは、4歳の長女と共に福島市内の友人の家に立ち寄ろうと自転車を止めた瞬間だ。「ママはここにいろよ!」。娘をなだめる間にも石壁が崩れ

落ち、電線はヒュンヒュンと音を立てて揺れた。友人宅で津波が町をのみ込む映像におののきながら、ネットやメールリングリストを駆使して原発の状況を片端から調べた。電源を喪失した第一原発で、燃料ベレットを覆う被覆管の破損が時間の問題らしい。夜更けに飛び込んだきた情報に凍り付いた。

宇野さんと友人、乳児から小学3年までの子ども4人が1台のワゴン車に乗り込み、深夜、吹雪の山道を西に進んだ。翌日、会津若松市内で夫と落ち合い、一家3人で夫の実家がある山口県宇部市に向かった。出発して間もなく、カーラジオから流れてくる第一原発1号機爆発の報道に触れた。「そうならないようにこれまで動いてきたのに、私たちは何てばかなんだろう」。涙がとめどなくあふれた。

## 避難者と被災地住民に共通の権利

宇部市に1カ月滞在した後、福岡県に母子だけでほぼ2年間、避難した。2012年6月に「子ども・被災者支援法」が施行されると、同法に基づいて、被災者が避難を選択しても、とどまっても必要な支援が受けられる体制の実現を求めて奔走。京都府に避難先を移してから2年後には、『避難の権利』を求める全国避難者の会」を立ち上げ、共同代表に就いた。

宇野さんは『避難の権利』はすでに避難した人たちや被災地に暮らす住民にとって、共通する救済の基盤であるだけでなく、将来、別の原子力災害が起きたときに人々が犠牲にされることなく生きていくための重要な権利なのです」と主張する。

## 対話が生み出すものに期待

60年を超えて原発の運転を可能にする「GX(グリーン・トランスフォーメーション)脱炭素電源法」が成立するなど、国が原発回帰の政策にかじを切った今、宇野さんは利害関係者同士の対話の重要性を痛感している。すでに少人数のグループを発足させ、省庁関係者や原子力研究者らを招いて不定期に集会を開く。名付けて「うみたいわ」。新たな創造性や価値観を対話によって「生み出したい」との願いを込めて。

パネル写真は訪れるたびに心が安らぐという京都市南区の東寺境内で。

(2024年9月取材)

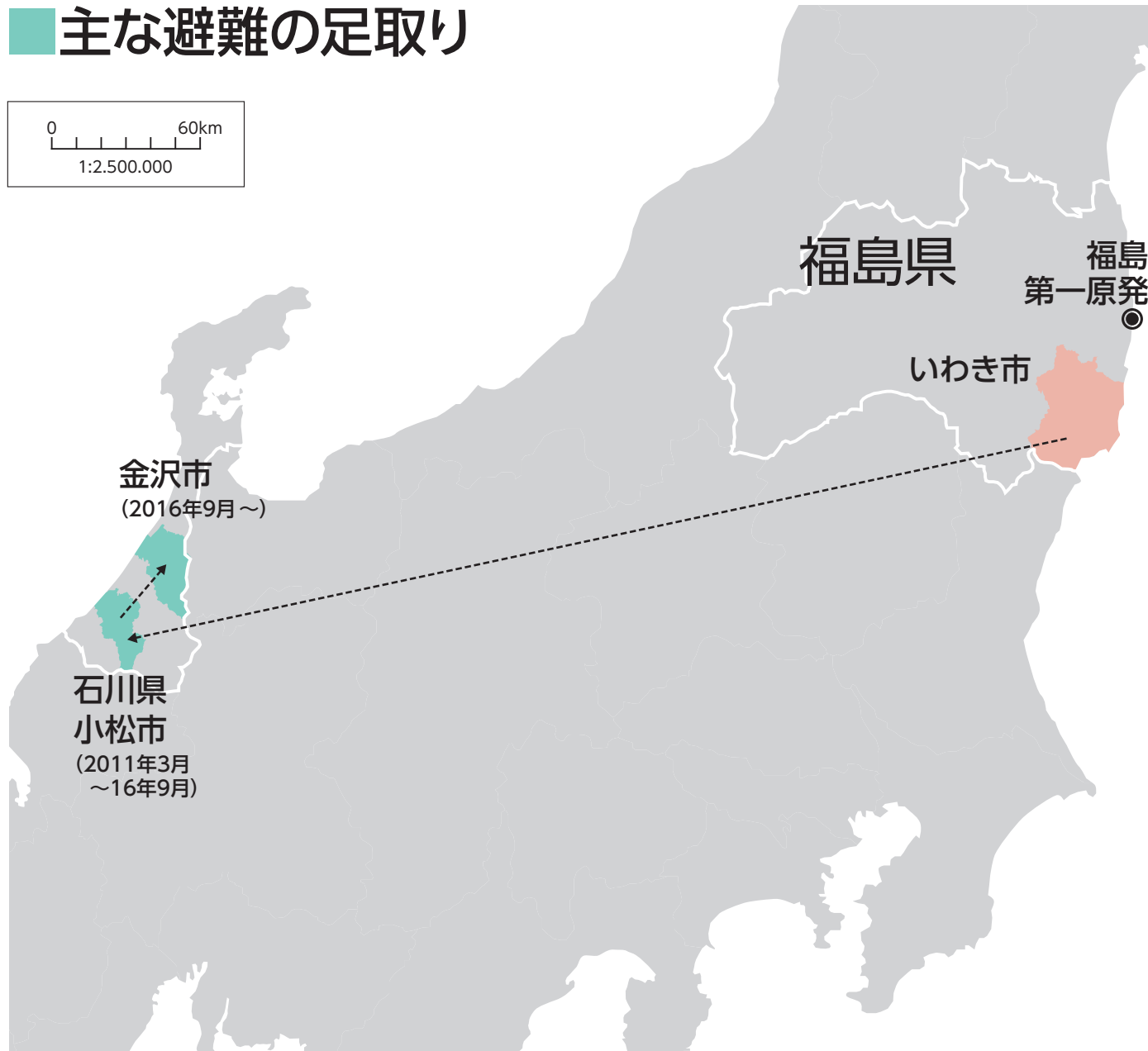






# 森島 幹博さん

レストラン経営、避難者団体共同代表  
「もう戻れない」



## 避難者から支援者へ

車の走行距離約1175<sup>km</sup>。福島第一原発事故の前までいわき市に住んでいた森島幹博さん(59)が怒涛の避難行の末にたどり着いたのは、北陸の地だった。苦難の3年間を過ごした後、金沢市でカフェを開業。自主避難者であることを公言すると、同じ境遇の人たちがカフェに集まって連帯するようになった。「避難者から支援者へ」。能登半島地震の被災者と自らの姿を重ね、同市内で定期的に交流会を開く。原発事故を経て百八十度価値観が変わった。「避難するもしないも選択の自由が認められる社会であってほしい」と願う。

## 事業好調のさなかに原発事故

あの日、海外でレストランを経営する親友を手伝って帰国の途に就き、飛行機が成田空港に着陸した直後、大地震に見舞われた。機内に7時間閉じ込められ、家族の無事を確認後、休憩するつもりで東京の友人宅に車で立ち寄った。早朝、ニュースは第一原発周辺の避難指示発令を報じていた。きびすを返して車に飛び乗り、いわき市の自宅を目指して国道6号をひた走った。

茨城県日立市近辺に差し掛かると、上り車線は避難の車で大渋滞し、反対に北上するのはほぼ自分一人なのに気付いた。「原発が危ない。お前だけでも引き返してこい」。東京の友人が電話で説得してきたが、そうはいかない。真夜中に自宅のドアをたたき、妻に当時9歳の長男と2歳の長女、母と伯父ら家族7人でミニバンに乗り込んで避難を開始。東京や京都の知人宅を転々とし、発災から11日後、一家を迎え入れてもいいという石川県小松市の親類の家によりやく行き着いた。

千葉県育ちの森島さんがいわき市に家族と移り住んだのは2007(平成19)年のこと。長らく飲食業界に身を置いていたが、母方の伯父が名産の「いわきだるま」の販売業を営んでおり、伯父夫婦に子どもがいないために後を継いだ。漁師の多い浜通り一帯で社寺の祭礼などに出店しては、だるまや縁起物売り歩いた。仕入れや宣伝を工夫し、震災前年には売り上げが以前の2倍以上に伸びた。原発事故は、だるまの倉庫を併設する自宅の新築を果たし、商売が軌道に乗ったその時の禍事まがごとだった。

## カフェ開業、避難者癒やしの場に

避難先の小松市では辛酸をなめる日々が続いた。子どもを連れて妻と別居し、住まいは2度変わり、多感な年頃の長男は不登校に。近隣の山



起死回生の場となった金沢市のカフェ「ロサンゼルス」の前で

代温泉(加賀市)で起業を試みたこともあったが、徒労に終わってしまう。飲食業で鳴らした自身の「再生」を懸けてカフェを開くと県内の貸し店舗を渡り歩いたところ、金沢城のすぐそばでお

あつらえ向きの物件を探し当てた。

いつも力になってくれる双子の弟が暮らす米国の都市にあやかったカフェ「ロサンゼルス」が開店したのは、くしくも震災から4年目の3月11日。森島さんの歩みが地元紙やテレビで紹介されると、子どもへのいじめなどを恐れて境遇を明かせなかった母子避難の母親たちが、店に来て涙ながらに悩みを打ち明けるようになった。「語らいの場が必要だ」。毎月11日午前11時に集まり、「住まわせてもらっているお礼に」清掃活動をした後、思いを吐露する「11(じゅういち)の会」が始まった。

## 能登半島地震の被災者もてなす

2024(令和6)年1月に能登半島地震が発生し、同年9月の豪雨災害が追い打ちをかけた。森島さんは復旧、復興の遅れにいら立ちを隠さない。「行政は避難者がいつ元の地域に戻るのか先に見通しを示した上で、その間の生活を保障してほしい」

24年10月、金沢随一の繁華街・香林坊で森島さんが経営する別のレストランで開かれた、同地震の避難者らの交流会。温かい飲食でもてなし、東日本大震災を契機に発足した金沢大学のボランティアサークルのメンバーが傾聴を行う。近くのみなし仮設に住み、輪島市で漆器店を営む柴田清さん(73)は倉庫や工房が全壊。後継者はおらず、廃業するつもりだという。それでも「若い人と会話できて楽しい。しゃべることでストレスが軽くなる」と表情を和らげた。

## 「避難の選択は自由」

森島さんは今も「避難者」であることにこだわる。そうしないと「子どもたちに対して、自室のある新築の家を捨て、机もベッドもおもちゃも全部捨てて、苦しい生活を強いた14年間を全部否定することになってしまう」からだ。

避難の形が強制であれ、自主であれ、「みんな古里を追われた同じ被害者」だという。「事故当初は(避難区域外の人が)何で逃げないんだと思っていた。でも今は違う。全て情報が開示される前提で、避難の選択の自由が認められればそれでいい」

**パネル写真**は経営するレストランで能登半島地震の避難者らと過ごす森島さん(右から2人目)。



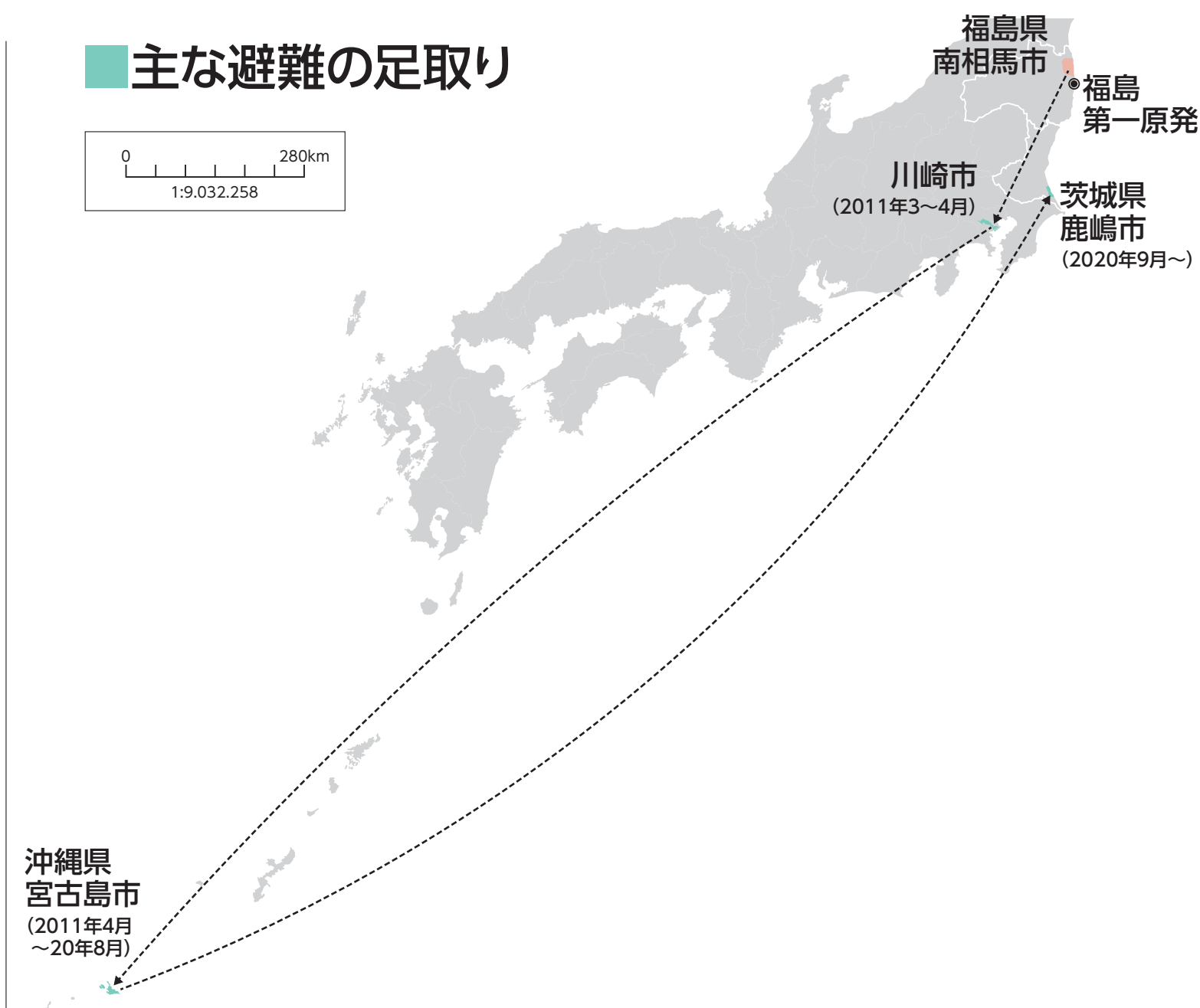




# 鎌田 昭二さん

元看護師

「今も避難中」



## 農家を飛び出し看護師に

福島第一原発が立地する大熊町の帰還困難区域の中で、除染廃棄物の中間貯蔵施設に組み込まれた熊川地区の出身。5人きょうだいの末っ子で、小学3年生の時に相馬郡金房村(現・小高区小屋木)の親戚の農家に養子に入った。子ども時代は稲作や葉タバコ栽培、養蚕などの手伝いに明け暮れ、地元の農業高校に進んだ。卒業後も農業に従事したが、「黒い物も白と言い含められる」家父長制的な雰囲気反発したり、旧来型の営農で生計を立てていくことに不安があったりして、20代後半で家を飛び出す。

鎌田さんがなりわいに選んだのは看護師の道だった。第一原発1号機が営業運転を始める時期と重なるが、原発の危険性を訴える著名な科学者の講演を聞いて共鳴した経験もあり、関連業界に職を求める考えはなかった。

## 古里から2千キロ遠くへ

発災の日は、小高区にあった精神科の専門病院で勤務していた。ナースセンターで打ち合わせの直後に襲った激しい揺れ。はうようにして閉鎖病棟の鍵を開け、100人以上の入院患者をいったんグラウンドに集めた。3月14日夜に患者らと共に警察手配のバスで避難を開始し、いわき市や南会津町を経由して18日、東京・世田谷の都立病院に行き着いた。

身を寄せた川崎市の長男の家で何気なくニュースを見ていると、沖縄県で被災者の避難を受け入れるとのテロップが流れてきた。「原発からできるだけ遠くへ」。大急ぎでメモした電話番号は県庁で、対応可能な自治体の連絡先を教えてもらい、片端から問い合わせた。3カ所ほど断られた後、通話したのが古里から南に2千キロ以上離れた沖縄県宮古島市。「どうぞ、来てください」。4月末、機上の人となった。

## 「昭三模合」で支え合う

同市中心部のアパートに住んでいた2012年7月の夏祭りの夜。名物の大綱引きで盛り上がった祭りの余韻に浸りながら家路をたどっていると、近所の居酒屋から三線(さんしん)の音や島唄がにぎやかに響いてくる。離島での一人暮らしも1年以上。「人恋しいな」。思い切って扉を開けた。「旅行? ヤマト(本土)から

来たの?」。三線教室の2階に同居する居酒屋「小春日」のママ、州鎌光子さん(74)が気さくに迎えてくれ、鎌田さんは常連たちを前に身の上を話した。州鎌さんが割り箸をパチンと割り、人の形を作りながら言った。「一人じゃないよ。支え合ってこそ人だからね」

沖縄には「模合(もあい)」と呼ばれる相互扶助と親睦の文化が残っている。月に一度、仲間が集って飲食を共にした際にお金を出し合って積み立て、1年ごとなどにメンバーが順繰りに受け取る仕組みだ。小春日の常連たちでつくり、鎌田さんの名を冠した「昭三模合」がこの日からさっそく始まった。

主に中高年のメンバーは14人いて、三線や歌舞、笛、太鼓など宮古島の豊かな芸能文化に携わる人ばかりだった。伝統行事の「二十日正月」に招かれたり、毎月陽気に泡盛を酌み交したりする、夢のような日々。鎌田さんもリクエストに応えて古里の民謡「新相馬節」を朗々と歌い上げ、喝采を浴びた。「昭三模合」は島と本土を往復しながら今も続き、州鎌さんは「命ある限り付き合っていきたい」と絆を誓う。

## 古里喪失の無念は消えず

2020年、鎌田さんは遠隔地での独居を心配する子どもたちのために従う。本土への帰り道、ひとり車で九州や四国を巡った。長崎県・雲仙普賢岳の噴火災害の痕跡などを見学しながら、火山国である日本を実感し「エネルギーを本気で考えるなら、安全に電力を得られる地熱発電が有効だ」と思い至ったという。「あんな事故を起こしたのに、原発の積極利用とか新設とか政治家がとんでもないことを言ってる。後始末は誰がやるの」

島から戻って4年、鹿島灘に面したのどかな平野の一軒家で、野菜や果樹を育てながらのんびり一日を過ごす。

―鎌田さん、今も避難中という認識はありますか。  
「あります。古里を喪失したからな」。好々爺らしい穏やかなほほ笑みがふつと消え、きっぱりと答えた。

パネル写真は茨城県鹿嶋市の自宅の庭で。

(2024年11月取材)



2019年、「模合」の仲間との北海道旅行で新相馬節を披露する鎌田さん



